東濃新報に「ひろた研修」を載せていただきました。

多治見自警団

【被災地から防災を考える】

報告…4年目の東北を訪ねて

震災復興の現実

多治見自警団 団長　松島　祥久

研修参加メンバー（慈恩寺で古山住職と）

東北大震災の発生から四年目を数えます。復興の様子を直接見ようと、多治見自警団は八月末に「ひろた研修」を実施しました。参加者は、自警団の被災地支援産直事業「ひろた基金」の一般会員も含め十四人（うち女性三人）です。

山道を抜け岩手県陸前高田市に入ると、町中が工事現場。背後にある山々を削って膨大な量の土を運びだし、浸水地域を海抜十四メートルにまでかさ上げし、さらに高台に住宅地を造成する計画です。

山を削った土をいちいちダンプカーで運び出していたのでは広大な浸水地域のかさ上げ工事は「二十年以上かかる」。そこで、「希望のかけ橋」と名付けた総延長二百二十メートルのベルトコンベアーのつり橋を縦横に架設し、二十四時間体制で山の土を降ろしています。これだと「十年に短縮できる」とか。

陸前高田市の復興のシンボル「奇跡の一本松」を見るにも、ベルトコンベアーの下をくぐりながらです。各地から訪れる人も多く、駐車場には売店もあって観光名所になっています。

大船渡市の駅前通りも浸水地域で、ぽつんぽつんと鉄筋の建物だけが残っている状態です。そのうちの一つ、大船渡プラザホテルに宿泊しました。ここも三階まで浸水したといい、全館をクリーニングして営業を再開しているのですが、大船渡市の浸水地域も五メートルほどかさ上げすることになっており、このホテルもいずれは移転することになります。

駅前通りの一隅に、十人ぐらいが入れる居酒屋が二十軒ほど並んだプレハブ造りの「大船渡屋台村」が建っていました。その内の一軒、被災前は駅前通りで店を出していたという店のママは、「もう年だからこれで引退するわ」と。

「大阪出身です。結婚して釜石に来て十九年、家は津波に流され、そこには今イオンが建っています。自分は仮設住宅に住んでおり、今日は集合住宅の抽選日。今回で希望する全戸が集合住宅に入れることになるのですが、集合住宅は各地に点在して建設されるので、どこの集合住宅に入れるかを抽選するのです。家賃は払わなければなりませんが、仮設住宅は狭いし、いろいろと問題も多いので、集合住宅に移れるのはうれしい。と言っても、集合住宅の完成は二年半後のことです。もとのように自分の家が持てるのはいつのことになるやら…」。

三陸鉄道・釜石の駅前に新日鉄住金の工場、その横に魚センターが二軒あり、ここで働く女性の話です。

諸行無常。当たり前のことなのでしょうが、いろんな人の人生の変遷は身に染みます。

陸前高田市広田町、慈恩寺の古山敬光住職は「少しずつ復興してきているが、被災地からすると、今なぜ東京オリンピックなのか、とも思う」と話す。東京でオリンピックのための建設工事が始まり、復興事業を担っていた業者が引き揚げたり、入札が不調になったりで、復興が遅れている事をなげいていました。

日本は人口減少に入りました。これに平行して国土が縮むわけはないので、土地も家も年々空いたところが多くなるということになります。多治見市でも古い住宅団地は〝限界団地化〟する一方で、新規の宅地造成が進んでいます。

東北の山を削って土地をかさ上げする。計画では完成は十年後。実際にはそれ以上の年月が必要でしょう。その間にも過疎化が進みます。

その時、削った山の土地も含めて眼前に広がる東北平野は何に活用することになるのでしょう。平時ではとても出来なかったであろう広大な土地整備事業は、TPPに備えて大規模農業を実践する場になるのでしょうか。それとも、大企業のための工場移転先でしょうか。

「今必要な道路を二十年後に建設する」のが日本の国土計画。土木業に携わりながらも、これでいいのか、という思いは拭（ぬぐ）えません。

東日本大震災発生以降、多治見自警団はこれまで、東北各地の被災地や原発事故に苦しむ福島県などを数回にわたって訪問しています。「自分たちに何らかの支援が出来ないだろうか」と思考する中、「地域の復興は産業の復興あってこそ」と、縁あって陸前高田市の広田湾の海産物を一口一万円で十年間継続して購入する産直事業を立ち上げました。「ひろた基金」と称し、一般市民にも広く呼びかけて、震災の翌年から約二百口でスタートし、継続して実施しています。

漁港の復旧工事も「採算が合わない」と、受け手がなく完全復旧はまだまだです。それでも、漁協の皆さんの産業復興への懸命な努力によって、私たちの産直事業も初年度はワカメ、昨年は帆立て貝、そして三年目となる今年は、東京築地でも最高値がつくと言われる広田牡蛎（かき）を頒布することができます。

今年は、十月末まで受け付けています。年内中に、一口につき二キロ程度のむき身牡蛎をお届けできる予定です。どうぞ、趣旨に賛同いただける方は、松島（電話＝〇五七二―二二―三一六五）までご連絡ください。

願わくば被災地の人々に平穏が訪れますように。

（多治見建設業協会理事長、藤本組社長）

かさ上げの高さを示す看板（上）と「希望のかけ橋」

広田湾漁協の加工場も見学